

使徒の働き 16:1-10

「主が導かれる時、従う準備ができている」

オンラインで参加してくださっている皆さん、そして対面でいらっしゃる皆さん、こんにちは。私たちの「使徒の働き」を通しての私たちの旅の中で、前回ご一緒した時にはパウロは第二次宣教旅行を新しいパートナーシラスと共に始めるところでした。

1 節には「それからパウロはデルベに、次いでルステラに行った。」とあります。2 節では「とイコニオム……」とあります。使徒の働き 14 章でデルベ、ルステラ、そしてイコニオムで何が起こったか覚えていますか？（著者は 16 章では、14 章で示されていたのと逆順になっていますが、恐らくパウロのチームが第二次宣教旅行では逆の方向（東）から来ているからでしょう。）14 章の順序で言えば、まずイコニオムでパウロとバルナバはキリストのメッセージを告げて、かなりの数の人々がそれを受け入れましたが、拒む者たちもいました。ある人々は彼らに非常に強く反対したので、そこに留まるのは安全ではなく、彼らはそこを去りました（使徒の働き 14:1-7）。ルステラでは、パウロが足の不自由な人を癒した後、人々は彼とバルナバを神々だと思い、彼らをワーシップする準備を始めました。しかしパウロが、自分たちは神々ではないと言い、さらにほかの人々がやって来てパウロとバルナバに反対することを話すと、地元の人々はパウロが死んだと思うまで、彼に石を投げ続けました。彼はどうにか生き延び、翌日バルナバと一緒にそこを去りました（14:8-20）。彼らはデルベへ行き、キリストの良い知らせを伝え、大勢の新しい信者を得ました（14:21）。最後に、パウロの一行はルステラとイコニオムをもう一度通り、彼らの働きをフォローアップして、新しくできた信者たちの群れを強めました（14:21-23）。もしあなたがそのすべてを経験したとしたら、ルステラやイコニオムのような場所へ戻って、様子を確かめに行くことに、どれほど意欲的になれるのでしょうか。パウロとバルナバはそれを行うのです。

さて、使徒の働き 16 章では、パウロとその一行はさらに同じようなことを行います。ルステラの新しいクリスチャンたちは彼と会い、話をします。彼らは、教会全体から宣教師たちが持って来た指示を受け取り、また、彼らが与えに来た励ましを受けます。そこでは物事がうまく進んでいるようです。教会は強められ、信者たちは着実に増えていました（5 節）。

1 節の後半で、私たちは「テモテという弟子」に出会います。パウロが 14 章でルステラにおいて石を投げられていたとき、キリストを信じる地元の信者たちの一団が彼の周りに集まり、彼のために祈ったと書かれています。テモテもその中の一人だったのではないかと私たちは考えますが、物語はそれをはっきりとは述べていません。

テモテについては、私たちは（1 節後半）「信者であるユダヤ婦人の子」とあります。テモテの父親の名前は分かりません。しかし、後にパウロがテモテに書き、現在は新約聖書の一部となっている最初の手紙（テモテへの手紙 第二 1:5）では、テモテの母親の名前がユニケであり、祖母（おそらく母方の祖母）がロイスであることが分かります。二人とも「純粋な信仰」を持つ女性です。テモテへの手紙 第二 1:5 で、パウロはテモテにこう書いています。「私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。」

テモテには、教会で働く者として有望な将来があるようです。「ルステラとイコニオムとの兄弟たちの間で評判の良い人であった。」（2 節）。私たちは、神様が私たちの教会の中に、テモテのような人、あるいはテモテのような人々を起こしてくださり、将来、主の教会に仕え、導いていく者として備えてくださるよう、祈り続けています。その人は誰でしょうか。おそらく、天の父なる神様だけがご存じかも知れません。

3 節で、パウロは驚くようなことをします。彼は「その地方にいるユダヤ人の手前、彼に割礼を受けさせた。彼の父がギリシヤ人であることを、みなが知っていたからである。」のです。なぜパウロはそうしたのでしょうか。もしこれがあなたにとって混乱するように聞こえるなら、それには十分な理由があります。前の章で、パウロは、新しくキリストを信じた男性たちに割礼を受けさせること（そして旧約聖書のすべての律法に従わせること）を主張する人々に対して、非常に多くの時間と労力をかけて反対したばかりです。ここで彼は考えを変えて、新しいチームメンバーを積極的に導いて割礼を受けさせているのでしょうか。いいえ。実際、後のガラテヤ人への手紙 2:1-4 では、パウロが別の人物、テトスというギリシア人を連れて行ったことについて言われています。テトスの場合、パウロとほかの人々は、彼に割礼を受けさせませんでした。テトスが旧約聖書のすべての律法に従うことを要求されていないので、割礼は必要ないと彼らは考えていたのです。

しかしテモテの場合、もしパウロが彼に割礼を受けさせなければ、テモテが将来の宣教に関わることになる多くのユダヤ人たちは、神様に献げられることを示すこの儀式を受けていないため、彼を汚れた者として拒む可能性が非常に高かったでしょう。これは公平でも正しいことでもないと言えますが、パウロとも皆も見えて取れる現実なのです。

「ユダヤの律法によれば、テモテはユダヤ人の母の息子であったためユダヤ人でした。しかし、割礼を受けていなかったため、厳密に言えば背教者のユダヤ人でした。」（自分の宗教の律法に従わない者、Bruce, p. 304）。もしパウロがワーシップの場所でユダヤ人とのつながりを保ちたいのであれば、自分のチームの一員がユダヤ教の最も基本的な教えの一つに従わないことを許しているように見られるわけにはいきません。

テモテが宣教チームの一員であることは、例えば彼らがユダヤ人の会堂に入るときなど、容易に具体的な問題となり得ました。そこにいるユダヤ人たちは、割礼を受けていない者がそこで教えることを受け入れがたいと考えるかもしれません。それでは、この方法でキリストの福音が広まっていくことが妨げられてしまい

ます。それを考慮に入れて、パウロはデモテに割礼を受けさせることが実際的に見てより良いと判断します。

割礼の問題に加えて、デモテの父親がユダヤ人ではないのに、ユダヤ人の女性と結婚しているという事実もあります。これは、ユダヤ教の教えに背くことだと理解されています。申命記 7:3-4 には、ほかの民族／宗教の人々（ヒッタイト人を含む七つの民族で、神様がヘブル人に故郷として与えると決めた土地から追い出すと約束された人々）について、次のように言っています。

また、彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。というのは、彼らはあなたの息子を私から引き離し、ほかの神々に仕えさせ、こうして主の怒りがあなたがたに向かって燃え上がって、あなたをただちに根絶やしにするからである。

デモテの両親や、今日の私たちがこれについてどう考えるかにかかわらず、これはパウロの一行が関わることになるユダヤ人たちにとって問題なのです。ですから、彼らは後にパウロがコリント人への手紙 第一 9:12 で書くことを実行しています。

ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。繰り返しますが、キリストを信じる者たちが旧約聖書の律法に従うことをどの程度、またどのように要求されるのかについて、使徒の働き 15 章で議論し、勝利する側に立った後でも、パウロは、割礼を受けていない若者を連れて行くことによって、伝統主義者たちに反対することを示すこともできました。しかし彼は、より大きな謙遜と、負けた側にいた人々への敬意を示す方法でこの状況に対処することを選びます。彼らも、これから先、クリスチャーの共同体の一員であり続けることができることを彼は心に留めているのです。

パウロの焦点は、自分の権利や、自分がしたいと思うことではありません。彼がこのことについて自分の考えをテモテに話したとき、テモテは何と言ったでしょうか。想像しましょう。「何をしたいですって？ ああ、うまい冗談ですね、パウロ！ 一瞬本気かと思いましたよ。え、本気なんですか？」また、パウロが割礼の要求を救いに必要なものとしてクリスチャンの教えに持ち込ませないためにあれほど激しく戦った後なのに、今度は一貫性がない、と主張して、この決定を批判する人々がいた可能性も十分にあります。

しかし、パウロの大きな関心は、これらの問題にあるものではありません。キリストのメッセージを広めることの効果にあります。彼は福音を広めることをチームの最優先事項とし、すべてのことをその下に置いています。彼は旧約聖書の律法をキリストの福音より上に置いているものではありませんが、だからといって単純に律法を投げ捨てているわけでもありません。これから何年にもわたる働きの中で、彼がその慣習や伝統に忠実であり続ける姿を何度も見ることになります。それらは今や、人々が救われるために必要なものではありません。しかし、それは福音を表す非常に有益な表現となり得るのです。

これは、コリント人への手紙 第一 9:22b-23 にある彼の言葉と一致しています。彼はこう書いています。「すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。」

パウロとそのチームは、単に法的に許容される範囲内で何ができるかという点だけを考えているわけではありません。むしろ彼らは、法の精神に従って行動しています。つまり、彼ら宣教者には、割礼という一つの行為を過度に重視したり、割礼を受けていない人々を裁くような態度をとったりすることから、そうした人々を徐々に遠ざけていこうという意図があるものと思われます。

パウロとその一行は、律法に従って自分たちが何をする権利を持っているかだけを考えているわけではありません。むしろ、律法の精神に従います。つまり、ユ

ダヤ人に対する愛の精神に基づき、割礼を極めて重要視する人々に対して、あえて理解と敬意を示そうと努めているのです。宣教師たちは、割礼という一つの行為を過度に重要視したり、割礼を受けていない人々を裁く傾向から、彼らを徐々に遠ざけていくことを目標としていた可能性が非常に高いでしょう。

繰り返しますが、宣教チームがこれらすべてを行うのは、キリストのメッセージが受け入れられる可能性を最大限にするためです。あなたと私は、周りの人々がイエス・キリストに出会い、イエスの従う者となる最大の機会を与えるために、どのような困難を進んで経験しようとするのでしょうか。

ほんの小さな例ですが、もうすぐハロウィンが来ます。ご存じかもしれませんが、毎年、ハロウィンを祝ってよいのかどうかについて、クリスチャンの間で議論があります。クリスチャンとは、キリストが私たちに教えられたように、敬虔な生活を送ることに自分自身を献げた人々です。子どもたちに悪霊や死んだ人々、怪物など、あるいは何であれ、そういうものに扮装させ、家から家へ歩いて、そこにいる人々が美味しいお菓子をくれなければ何か悪いことをすると脅すのは、敬虔なことなのでしょうか。問題ないと言う人もいれば、それは間違っていると言う人もいます。さらに、自分たちにとっては問題ではないと考えながらも、それを悪いことだと考える兄弟姉妹への敬意から、自分たちはそれを避けるという人々もいます。

クリスマスの飾りとしてクリスマスツリーを使うことをやめる人々もいます。ドイツなどのヨーロッパ文化にキリスト教が伝わる前の宗教生活の中に、このようなことを行う習慣があったため、キリストの誕生を祝うためにこのような木が用いられるのを見ることに、抵抗を感じる人々もいます。多くのクリスチャンは、それが私たちにとってヨーロッパのキリスト教以前のいかなる宗教ともつながりのない意味を持つと知っているため、これを気にかけていません。しかし、自分のクリスチャンの兄弟姉妹に問題を生じさせないようにするために、クリスマスツリーを飾りとして用いる習慣をやめる人々もいます。

ほかに、あるクリスチャンたちが、それは聖書の教えに反し、神様がご自分の民に望んでおられることではないと考えているため、アルコールを完全に避ける人々もいます。例えば、私はアルコールを飲まない家庭で育ちました。聖書の教えから、アルコールを 100%避ける必要があるとは思えません。しかし、エペソ人への手紙 5:18 は、「ぶどう酒に酔ってははいけません。…むしろ、御霊に満たされなさい。」と教えています。ですから、少量のアルコールなら問題ないと思うようになった後も、例えば両親とレストランへ食事に出かけたときに、それを飲むのは正しいとは思いませんでした。飲む権利を押し通すことは、両親との関係を損なうことになったと私は思いますし、私にはそれよりも関係のほうがはるかに重要だったのです。キリストに従う人々が、それ自体は間違っているとは考えていないけれど、それを問題だと考える他の人々とうまくやっていくために避けている、ほかに多くのことを思い浮かべることができるでしょう。

キリストの福音が受け入れられやすくなるように、特定のことを犠牲にするクリスチャンはほかにもいます。その中には、神様と教会からその指導者として仕えるように召され、そのために自分自身やほかのクリスチャンが迫害されるかもしれないことを知りながら、それを受け入れる人々がいます。その一人が最近ニュースになっています。中国の金明日(Jin Mingri)牧師 (a.k.a. Ezra Jin) です。彼は、理由がやや不明確なまま、中国政府によって昨年何月かの間投獄されていました。今年 5 月、米国大統領と中国政府の首脳が関与し、彼の状況について話し合う事態となりました。幸いなことに、この事は金牧師の釈放につながり、ニュースでも報じられました。しかし、彼の事例は、キリストに仕えるために罰せられている多くの人々を象徴するものです。その中には、同じシオン教会ネットワークに属する他の 8 人の牧師たちがおり、彼らは今もなお投獄されています。彼らは、このようなことが起こると知りながら、福音のために喜んで仕えてきました。私たちは彼らを誇りに思い、自分たちの信仰を生きる自由が与えられていることを感謝し、すべての人のための信教の自由のために働けることをできる限り行うことができます。

ところで、おそらくこの時期には、教会のメンバーたち、おそらくテモテの母教会も、彼の人生における神様の導きを認め、それを確認したのだと思われます。テモテへの手紙 第一 4:14 で、パウロはテモテにこう書いています。「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません。」また、この頃にパウロがテモテに按手し、彼の働きのために神様の御霊から特別な祝福を与えたということもあり得ます。テモテへの手紙 第二 1:6 で、パウロはテモテにこう書いています。「そういうわけで、私はあなたに思い起こしてほしいのです。私の按手によってあなたのうちに与えられた神様の賜物を、再び燃え立たせてください。」

使徒の働き 16 章の話を続けます。4 節では、「さて、彼らは町々を巡回して、エルサレムの使徒たちと長老たちが決めた規定を守らせようと、人々にそれを伝えた。」とあります。つまり、使徒の働き 15:29 に記されている、新しい信者たちに教会が送ることを決めたメッセージです。

すなわち、「偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けることです。これらを避けていれば、それで結構です。祝福を祈ります。」

使徒の働き 15:23b によれば、そのメッセージは「アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たち」に届けられることになっていました。それらの場所はすべて非常に近く、パウロとその一行を送り出した教会の近くにあります。今や彼らはその地域をはるかに越えて進んでいます。同じ指示を与えています。彼らはそれを、特定の少数の教会だけに対する教えではなく、すべての新しい教会に対する教えとして理解していたようです。

そして 6 節前半では、「フルギヤ・ガラテヤの地方を通った。」とあります。彼らは、ほとんどどこへ行ってもそうしていたように、ここでもキリストのメッセージを伝えたと考えることができます。どうやら、そのメッセージを信じて受け入れた人々がいたようです。それは、使徒の働き 18 章に至ると、パウロが「ガラテヤの地方およびフルギヤを次々に巡って、すべての弟子たちを力づけた。」とされています。

ここから、神様がご自分の民をどのように導かれるのかについて、私たちに多くのことを示す箇所に入ります。6 節前半では、「アジヤでみことばを語ることを聖霊によって禁じられた」とあります。また 7 節後半では、「テニヤのほうに行こうとしたが、イエスの御霊がそれをお許しにならなかった。」とあります。

なぜ神様は、ご自分の民がご自分のメッセージを人々に伝えることを妨げられたのでしょうか。著者はその正確な理由を知らないか、それを明らかにもしていません。おそらく神様だけがご存じなのでしょう。もしかすると、すでにそこには福音を伝えている別の人々がいたのでしょうか。あるいは、メッセージを聞く人々が、そのときにはそれを受け入れないことを神様はご存じだったのかもしれませんが。後になれば準備ができるけれど、まだその時ではなかったのも、時期が適切ではなかったのかもしれませんが。あり得ることです。おそらく主は、この地域でご自分の教えをその後告げ知らせる別の人々を考えておられたのでしょうか。ペテロの手紙 第一の最初の節を読むと、ペテロがこの同じ地域、ガラテヤ、アジヤ、ビテニヤなどで成長している教会に手紙を送っていることが分かります。

今日の教会の人々は時に、「どうしてあの牧師に私たちの教会を導いてもらえなかったのだろう？」と考えます。ある人は、「あの伝道者にここへ来て話してもらえさえすれば、神様はこんなにも大きなことをしてくださるのに！」と言うかもしれませんが。牧師招聘委員会や宣教チームの指導者たちは、「その方がここに来てくださることが、神様の御心であり、彼/彼女がここに来てくれれば多くの人々への大きな祝福になるだろうと私たちは思っていた。しかしうまくいかなかった。神様は何をしておられるのだろうか？」と感じるかもしれません。しかし神様にはご計画があり、それを神様の時と方法によって成し遂げられます。神様は、初めからご自分の考えておられることをいつも私たちに示されるわけではありません。後になってそれが分かることもあれば、いつか天国に行ってからでなければ分からないこともあります。もし永遠に分からないとしてもです。しかし私たちは、主がご自分のしておられることをご存じであると信頼し、喜んで主に従うよう召されています。

今日の物語に出てくる宣教師たちは、が時に自分たちにとって不思議な方でいらっしゃることを体験しています。彼らは、単に考えを巡らせたり、数学の公式を当てはめようとしたりするだけでは、神様が次に何を求めておられるのかを知ることにはできません。神様は、異なる時期や異なる導き方を通じて、彼らを様々な行動へと導きます。ある聖書の教師（Lloyd Ogilvie, Acts, p. 239）が書いているように、「御霊は扉を開き、また閉め、ある可能性には『ノー』と言い、それを究極の『イエス』の一部とするのです。」

私が大学生だったとき、チャーリーという人物を知っていました。彼はクリスチャンだったと思いますし、例えばどこへ行っても学ぶかを決めるときなど、自分の人生を導いてくださるよう神様に祈り、求めていたと考えてよいと思います。しかしチャーリーが私と同じ大学のキャンパスにいたのは、主に授業の登録日に、彼が私たちの大学を、本来行くつもりだった道の向かい側にある別の大学と間違えたためでした。道に迷って間違えて私たちの大学に来てしまったとき、彼は辺りを見回し始め、授業登録のためのさまざまな列に並び、人々と出会い友人を作り始めました。彼はそこが良い場所のようだと思い、どうにか家族と大学の両方に、そこに入学することを認めてもらいました。チャーリーはそこで4年間、良い経験をしたと思います。この奇妙な経緯は、導きを求める祈りに対する神様の答え方だったのでしょうか。私は「そうではない」とは言い切れません。特に、神様が愉快なはずらをどれほど楽しめるように見えるかを考えると、このような出来事を通して誰かを驚かせることは、神様の御性質にふさわしいことなのかもしれません。

使徒の働き 16 章の物語においても、私たちの人生においても、神様が常に主導権を握っておられます。それは、神様に仕える中でご自分に従う者たちが経験する、すべての変化と困難を通して明らかです。神様の働きは、教会の組織やそのさまざまな企画委員会から始まるものではありません。それらがきっかけとなることもあれば、もっと自由奔放な形で実現することもあるでしょうが、もしそれが真の神様の働きであるならば、決してそれらの組織や委員会のおかげで起こることはないのです。

7 節後半では、パウロの一行について、「ビテニヤのほうに行こうとした」と書かれています。ここで使われている動詞は、彼らが単にそれについて考えていただけではないことを示しています。彼らは、考えたり祈ったりする中で、ビテニヤについて幻や夢、あるいは何となくの感覚を持って、それでそこへ行かないことを決めたわけではありません。彼らは行こうとしましたが、何らかの方法で止められたのです。これは神様の導きの一部として示されています。私たちの人生の状況や出来事を通して導いてくださる主に感謝しましょう。そこには、私たちが好むものも、好まないものも、予想できるものも、できないものも、はっきりと理解できるものも、頭をかきながら不思議に思うしかないものも含まれています。神様は、それらすべてを用いてご自分の目的を成し遂げることに非常に長けておられます。物事が計画どおりに進まないとき、「今あるもので進む」ことを学び、残りのことを心配しないようにしましょう。そうするとき、私たちは救い主や多くの偉大な弟子たちの足跡に従うことになります。

しばらく待ち、求め、そしておそらく少し苛立ちを感じた後、宣教チームはついに神様の導きについて明確な感覚を得ます。そこで著者（ルカ）は、10 節でこう言います。「私たちはただちにマケドニヤへ出かけることにした。」ここで「私たち」と書かれていることに注目してください。「彼ら」でも「パウロとシラス」でもありません。それまではずっとそのように書かれていました。どうやらルカが一行に加わったようです。この旅の初め、ほかの人々が列挙されているときにはルカは出てきませんし、8 節のトロアスまでずっと「彼ら」という言葉を使っています

（今日の聖書箇所最後に彼らがいる場所です）。しかし今、彼が途中のどこか、非常に可能性が高いのはトロアスで加わったようです。トロアスは、今日のトルコの西海岸にあり、エーゲ海を挟んでギリシアの向かい側にあります。

今日の物語の出来事より前から、シラスが自分の人生の次の段階についてどのような計画を持っていたとしても、それを進んで手放し、パウロとともに行くようにという召しに応じたことを私たちはすでに見てきました。今度はデモテとルカの両方が、ほかに約束していたかもしれないことを脇に置いて、このチームに加わ

りました。そして、ついに主から前進の許可を受けると、宣教チームは時間を無駄にせず前進します。聖書の物語に出てくる初代クリスチャンたちが、いかに自由であるかは注目に値します。彼らは、自分たちの目的が明確なので、計画の変更に関心を開くことができます。神様のより大きな目的を確信しているため、短期的な計画をその目的に合わせて変更する必要が生じたとき、キリストの弟子たちは、主が新たに与えてくださる導きに従う用意ができています。パウロとその一行は、自分たちで計画を立て、それを神様に祝福してもらおうとしているわけではありません。彼らは主の導きに心を開き、神様が別の方向へ導かれるときには、自分たちが考えていたことがなんでもあれ、進んで、変える備えができています。

この物語のこの時点から、初めてキリストの福音がヨーロッパへ伝えられます。ここにいる私たちの何人かは、このことの結果として、かなり直接的に益を受けています。キリストのメッセージはヨーロッパ全体に広がり、そこから北アメリカへ、そして最終的には世界中へ広がりました。ある地域の人々にほかの地域の人々より早くそれが与えられた理由は、おそらく神様だけが知り、知恵と恵みによって管理しておられることです。しかし、今や私たちは皆、キリストにある救いの良い知らせを持っています。それは、私たちが深い感謝をもって握りしめ、まだそれを受け取っていないすべての人に、愛と信仰をもって伝えていくためにあるのです。

10 節後半には、「神様が私たちを招いて、彼らに福音を宣べさせるのだ、と確信した」とあります。「確信した」のです。他の場合には、むしろ「神様が私たちにしないようにと告げられた」とか、「状況が私たちを止めた」というふうになっています。この物語の中で神様が御自分の民をどのように導かれるかが、様々な方法と状況の組み合わせを通してであることに、改めて注目してください。あるものはより感情に関わり、あるものはより思考に関わります。あるものは閉ざされた扉を通してであり、あるものは開かれた扉を通してです。しかし今日の物語においても、また私たちの信仰の人生においても、創造的で知恵に富んだ私たちの神様が、その過程全体を導きながら働いておられるのです。

新約聖書の時代と同様、今日のクリスチャンにとっての大きな課題は、自分たちの人生における御霊の導きを見出すことです。そのためには、水晶玉を読むように神様の御心や人の心を読み取るような特別な霊的な力を持つ必要はありません。しかし私たちは、耳を傾ける必要があります。神様は御自分の良い計画の中で、正しい時に正しい方法を見出し、私たちが理解できる仕方で御自分の民に語ってください。しかし神様は一般に、メッセージが届いた際にそれを真摯に受け止める用意ができていない人々に語りかけられます。神様は通常、すでに自分の意志を神様の御心に明け渡し、次の導きが与えられたらそれに従うと決めている人に対して、最も明確な形で語りかけられるのです。神様は聖書における御自分の教えと矛盾する仕方で語られることはありません。ですから私たちは、神様が過去の他の状況において御自分の民をどのように導かれたかを注意深く見る必要があります。それは、自分自身の声やほかの人々の声を、聖霊の声と取り違えることを避ける助けになります。心と考えを開いて耳を傾けるなら、私たちが神様に仕える中で、一瞬一瞬、一日一日、一年一年、神様は私たちを導く方法を見つけてくださいます。私たち自身の人生や家族、教会、日々の生活で関わる人々、私たちがそれぞれ属する国々、そして神様の造られた世界にいるすべての人々に対して、神様がそのことを行ってくれるよう、改めて神様に願い求めましょう。

主よ、今日の物語に登場する宣教チームのように、あなたが私たちを導かれるとき、すぐに従う準備ができています者としてください。進むべき道を示し、あなたと人々への愛の心を与えてください。その愛によって、私たちが信仰をもってあなたに従って歩むことができるようにしてください。あなたの御声と、それに競い合うようにして私たちに語りかける多くの他の声との違いを知るための知恵を与えてください。キリストにある変わることをない救いのメッセージを、言葉と行いによって伝えるようにという、あなたの召しに従うことができるようにしてください。そうする中で、私たち一人ひとりとしても、また教会としても、「信仰を強められ」（5節後半）ていく者となることができますように。「日ごと」（5節後半）であれ、あるいはあなたがお選びになるどのようなペースであれ、この信仰の共同体に

加わる信者の数が、そしてさらに多くの人々が、絶えず増えていきますように。主よ、私たちの人生の中に、ますます深くあなたの御国をもたらしてください。そして、私たちを通して、あなたの全世界へとそれを広げてください。キリストの御名によってお願いします。アーメン。

参考

- Biblestudy.org. (n.d.). Apostle Paul's Second Missionary Journey Large Map. Retrieved August 8, 2026, from <https://www.biblestudy.org/maps/apostle-paul-second-missionary-journey-large-map.html>
- Bruce, F. F. (1988). *The book of the acts. The New International Commentary on the New Testament*. Rev. Ed. Gen. Ed. Bruce, F. F. Eerdmans Publishing Company.
- Gill, J. (1746-1763). *John Gill's Exposition of the Bible*. Retrieved September 10, 2026, from <http://www.biblestudytools.com/commentaries/gills-exposition-of-the-bible/matthew-8-20.html#c>
- Henry, M. (2008). *Matthew Henry's commentary on the whole Bible. 1-volume edition, complete and unabridged*. Hendrickson Academic.
- Ogilvie, L. J. (1983). *Acts. The Communicator's Commentary*. Word Publishing.
- Sekulich, H. (2026, July 5). Chinese Underground Church Figure Jin Mingri Freed from Prison. British Broadcasting Corporation (BBC). Retrieved September 13, 2026, from <https://www.bbc.com/news/articles/c4gy51ky75vo>

引用元提示：

『聖書 新改訳第三版』

聖書 新改訳©2003 新日本聖書刊行会

より規定範囲内で引用

Unless translation abbreviations are not mentioned, Bible quotes are from:

NIRV stands for New International Reader's Version.ⁱ

Holy Bible, New International Reader's Version®

Copyright © 1995, 1996, 1998 by International Bible Society
